関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

ロマのメルヘンに登場する怪物たち

その他のタイトル	Die Ungeheuer in den Marchen der Roma
著者	村上 嘉希
雑誌名	独逸文学
巻	47
ページ	197-229
発行年	2003-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018104

関西大学『独逸文学』第47号 2003年3月

ロマのメルヘンに登場する怪物たち

村 上 嘉 希

はじめに

伝説やメルヘンには大昔からさまざまな怪物が登場する。巨人、ひとつ目小僧、河童、メドゥーサ、人狼など枚挙にいとまがない。ロマのメルヘンにおいてもそれは例外ではなく、異形のものたちが縦横無尽に活躍する。この論ではロマのメルヘンにおいて特に目を引く、ヴァンパイア、ドラゴン、悪魔について論じてみたい。これらはどの文化圏においてもよく見かける存在であるが、それゆえにロマ独特の特徴を確認しやすいのではないだろうか。ロマは流浪の民族であり、その通過した様々な地域の文化を受容してきた。それらの怪物たちを考察することにより、キリスト教の影響や故郷であるインドを源とする独特の世界観を、確認していくことがこの論の趣旨である。

なお、テキストはロマ研究の第一人者であるマルティン・ブロック（Martin Block）と、ヴァルター・アイヘル（Walther Aichele）が、東南ヨーロッパにおいて複数の研究家が蒐集したものを、ドイツ語訳し編纂したものと、ロマの先駆的な研究家であるハインリヒ・フォン・ヴリスロキ（Heinrich von Wlislocki）が、1883年にトランシルヴァニアにおいて蒐集しドイツ語訳したものを使用した。本論におけるロマの呼称は筆者自身による文章はロマで、引用箇所は「ジプシー」で統一した。

1　ヴァンパイアとは何か

血を吸う怪物、それに類した妖魔は古くから世界各地に存在する。どれをもって吸血鬼と判断するかは、さまざまな尺度が存在するうえ非常に困難なのであるが、ヴァンパイアという言葉が定着し始めたのは18世紀頃、特に1730年代のことである。語源はこの時代にたくさんの吸血鬼騒ぎがおきたスラブ語圏であり、vampirという語がドイツではそのまま

借用され、Vampirとなり、英語圏ではvampireとなった。

吸血鬼の発生には迷信や妄想などが深く関係してくる。事実、情報が行き渡りにくいロシアや東欧の山村で吸血鬼騒ぎは頻発している。吸血鬼発生の原因となったであろう事例にはさまざまなものがあり、まず第一に生前埋葬が挙げられる。これは医師の少ない田舎に多かったのであるが、病気や事故で仮死状態となった患者が、死んでいるものと勘違いされ、棺桶に入れられ、土葬されたケースである。患者は後で息を吹き返しても、真っ暗闇で、身動きがとれず、最後には飢えと呼吸困難に陥り、苦しみもがき死んでいくのである。再び掘り起こされたときに、棺桶の蓋の裏には、掻きむしられた傷痕が残り、手や口が血まみれになっているので、その姿はさながら吸血鬼のように見えるということである。この種の仮死状態の原因として、代表的なものにカタレプシーが挙げられる。これは強硬症といわれ、全身が硬直状態に陥り、筋肉運動が止まり、脈拍も落ち、眼球も見開いたままの状態が続くので、死の状態と見分けがつかなくなるのである。

吸血鬼発生の第二の要因として、死体が腐敗していないケースが挙げられる。墓を掘り起こしたときに、極寒の地では遺体が凍りついて原型を留めていることがあり、逆に乾燥した地では、遺体がミイラ化していることがある。この場合、不死の者と認識されることがよくあった。また死体が実際には腐敗していた場合でも、見間違いによるものもあり、体全体がふっくらとして赤みを帯びて、まるで生きているように見えたという吸血鬼に関する証言が残っているが、それは体内にガスが溜まって膨張していただけのことであろうと考えられる。また特殊なケースでは、遺体が完全に密閉された状態にあった場合、数百年まえのものでもそのまま残っていることもあった。

その他に吸血鬼発生の要因を挙げるとすると、18世紀初頭に東欧諸国に猛威をふるったペストについても触れねばならない。まずペストという病気によって、多くの人が皮膚に出血斑を残しながら死んでいったことに対する恐怖が、民衆に吸血鬼のような妖魔の幻想をつくりださせたともいえる。また大量の死体を迅速に処理していくために、やはりまだ完全に死んではいない人を葬ってしまう事態が生じ、遺体と思われていたものが急にふらふらと起き上がったとき、妖魔とみなされてしまうの

である。

さらに中南米に生息する吸血コウモリに関する情報が、コロンブスの新大陸発見とともにヨーロッパに広まったことも、吸血鬼のイメージの形成に一役買っているように思われるし、キリスト教の血と肉の秘蹟、すなわち聖者の血を飲むことで神に近づき、永遠の命を保つといった思想が、吸血鬼の伝説が広まる土壌になったとも考えられるであろう。

スラブ語圏におけて度重なって報告される吸血鬼事件は、ヨーロッパ全土に大きな衝撃を与えることになる。しかし英独仏においてはむしろ騒ぎになるというよりは知識階級の好奇心の対象となり、その後の19世紀のヴァンパイア文学の土台が形成されることとなる。

多くの人が持っているヴァンパイアのイメージは、ブラム・ストーカー（Bram Stoker）が書いた長編小説『ドラキュラ』（“Dracula”, 1897）に基づいているところが大きい。ヴァンパイア＝ドラキュラと誤解している人も少なくなく、この小説が後のヴァンパイアのイメージをおおむね確定したといえる。この小説以前にも特にイギリスでは、シェリダン・レ・ファニュ（Sheridan Le Fanu）の『吸血鬼カーミラ』（“Carmilla”、1872）をはじめとした重要な作品があったり、パリを中心にヴァンパイアを題材にした演劇がもてはやされたりしていたが、ブラム・ストーカーの作品ほど後に決定的な影響を与えた作品はないといえる。だがストーカーが描いたこのドラキュラ伯爵には、実在のモデルがいるということは意外に知られていない。それはルーマニア史において、串刺し公の名であまりに有名なヴラド・ツェペシュ（Vlad Ţepeş、在位1448、1456－1462、1476年）である。ドラキュラのモデルであるヴラド・ツェペシュが生きた15世紀のルーマニアは、ワラキア、トランシルバニア、モルドバの3国に分かれていた。いずれの国においても、内部では公位継承を狙う者たちに対して警戒し、外部ではオーストリアやハンガリーなどの近隣諸国の動向に注意を払ったうえ、オスマン＝トルコという難敵と対峙しなければならないといった、危機的状況に立たされていた。ツェペシュのいた当時のワラキアは国力も弱く、極めて不安定な立場であり、彼は長い間トルコ側の人質として捕らえられていた。1456年にツェペシュはワラキア公の地位に就く。そして彼は独裁的専制政治を目指すことになる。ここからが吸血鬼ドラキュラのモデルとなっ

た、彼の悪名高く血なまぐさい所業の始まりとなる。大国オスマン＝トルコと対抗するためには、今までのような不安定な国内情勢では無理があるので、国力を増強し、秩序を回復する必要があった。そのため徹底的な中央集権体制が敷かれることになり、無益とみなされたものは切り捨てられることになる。その冷徹さは後のナチスに通じるものがある。

例えば自分の命令を無視する地主貴族たちに対して、国の弱体化の責任を問いつめ、その500人を串刺しの刑にした。そしてその死体を晒しものにして、野鳥のついばむままにさせた。また他では豪華な食事を振る舞うと御触れを出して、老人、貧乏人、浮浪者、病人などを数箇所に集め、彼らに対して、このつらい世の中から逃れたくはないかとたずね、肯定すると建物に火を放ち皆殺しにした。このようにツェペシュは富国強兵の邪魔となるものを有害とみなして一掃したのである。

当然このような圧力は、当時のルーマニアに大勢いたロマの身にも及んだ。ツェペシュはロマのことを快く思ってなかったようで、このような記録が残っている。

スイスのザンクト・ガレン修道院図書館所蔵の写本第806号より

かつて彼は、盗みを働いたジプシーを捕らえたことがあった。仲間のジプシーたちがドラキュラのもとへ参上して、その男の釈放を嘆願した。ドラキュラは「吊し首が当然だ。お前らが手ずから、こやつを吊し首にするがよい」と命じた。「手前どもにそんな風習はないので、それはできません」と、かれらが答えると、ドラキュラは件のジプシーを鍋で煮た。それが煮あがるや、ドラキュラはジプシーたちに強制して、彼の肉も骨ものこらず喰わしめた[1]。

三百人ばかりのジプシーの一団が彼の国にやってきた。そこで彼は重だったもの三人を捕らえて、それらを焙り焼きにし、仲間のジプシーたちにその肉を啖わせてこう述べた。「このようにおまえらは、

1　レイモンド・T・マクナリー／ラドゥ・フロレスク共著　矢野浩三郎訳『ドラキュラ伝説―吸血鬼のふるさとをたずねて』、角川書店、1987年、273ページ。

おたがい一人も残らなくなるまで、共喰いをつづけなければならない」さもなくば、かれらをトルコ軍とのいくさに送りだして、戦わせるぞという。ジプシーらはすすんで彼が赴かせようとした合戦の場に出かけていった[2]。

このようにカニバリズムを思わせるような残酷な逸話が残っている。ツェペシュがいかにロマを嫌っていたかが推測できるが、これは他国から見たツェペシュに対する印象によって、微妙に脚色されているのではないだろうか。ツェペシュは本国ルーマニアにおいては、むしろ英雄扱いされている文献が多いのであるが、他国では悪鬼のように見なされ、むやみに残酷なやり方で人を殺して楽しむような記述が目立つからである。ツェペシュが富国強兵のために非情な大量虐殺を行ったのは事実であるが、その徹底振りがすさまじかったため、そのことに対する恐怖が周辺国における情報に尾鰭をつけさせたとも考えられる。

1461年、オスマン＝トルコ帝国のスルタン、メフメト二世（Mehmet Ⅱ、在位1444－46、1451－81年）はワラキアに使者を送り、莫大な貢納金を要求する。ツェペシュは使者を串刺しの刑にして晒し、ここから両国は大規模な戦争へと突入していく。ツェペシュは、ドナウ川南岸のトルコの領地へ先制攻撃し、約二万三千人を惨殺する。これには時のローマ法王も「この行いこそ真のキリスト教徒の行いである」と大喜びした。頼みにしていたハンガリーから援軍が送られることはなかったので、ワラキアは無勢でトルコと戦わねばならなかった。ワラキアの兵力三万に対してトルコは十数万、普通に戦って勝てるはずもなく、初戦こそ敗北したものの、その後、地の利を活用したゲリラ的戦法を使って、トルコに勝利した。

なおこの戦争の中で非常に悪名高い逸話がある。ワラキアの首都トゥルゴヴィシュテ郊外に、何とか到着したトルコ兵は驚くべきものを目にすることになる。二万人もの兵士の死体が串刺しにされたまま林立していたのである。それは腐敗してカラスに食われ、見るも無残なありさま

2　同上書、276-277ページ。

であった。またそれはトルコ兵だけではなく、ツェペシュに逆らったドイツ人、ハンガリー人、ルーマニア人も含まれていた。これを見たトルコ側は戦意を喪失したといわれる。ヴラドがツェペシュすなわち串刺し公と呼ばれるゆえんである。補足であるが、ドラキュラというあだ名には、ドラゴン騎士団員の称号を持っていた父親ヴラド・ドラクル（Vlad Dracul、在位1436－1442、1443－1447年）の息子、小ドラクルの意味と、悪魔という意味があるといわれている。

ツェペシュはその後、ハンガリー国王の陰謀で12年間幽閉され、一時は再びワラキア君主の地位につくが、1476年地主貴族の陰謀で殺害される。46歳であった。ツェペシュの残虐性はある意味、国を守るための知略に裏打ちされたものであったといえるのであるが、ドイツやロシアをはじめとしたヨーロッパの国々では、その暗黒面ばかりが強調されるようになり、血に飢えた怪物といったレッテルが貼られるようになるのである。そしてこの誇張されたツェペシュの人物像と、18世紀からの奇怪な吸血鬼事件、ルーマニアの民間伝承、作家ブラム＝ストーカーの独創性が合わさって、典型的なヴァンパイアのイメージが形成されることとなる。その特徴といえば、まず不死であること、人間の生き血を吸うこと、貴族であること、影がなく鏡に姿が映らないこと、常人の数倍の怪力を持っていること、変身能力があり、コウモリや狼、さらには霧にも変身できること、するどい牙を持っていること、などが挙げられる。これらの秀でた面に反して、ニンニク、十字架、聖水などに弱く、また退治するときには心臓に杭を打ち込み、首を切り落とすといった方法が取られる。なお日光に当たると燃え尽きてしまうというのは、ストーカーの記述にはなく、ただ太陽光線を嫌うというだけである。ドラキュラが日光に当たると滅びるという描写は、ドイツのプラナ・フィルム社製作の、サイレント映画『ノスフェラトゥ』（„Nosferatu, eine Symphonie des Grauens“, 1922）からきている。

2　ロマのメルヘンにおけるヴァンパイア

ロマにおいてヴァンパイアに相当するものを「ムッロ」（Mullo）という。マシュー・バンソン（Matthew Bunson）の『吸血鬼の辞典』（“The Vampire Encyclopedia”, 1993）にはこのように書かれている。

muli、muloなどとも言う。ジプシーに伝わる屍鬼で、幽霊と同義語。その残虐で強欲な性質ゆえに恐れられた。ムッロは、不自然な死に方をした者（多くのジプシーは死そのものを不自然なものと見る）や、正しくない葬儀を受けた者、あるいは即死した者などがなるとされた。その外見や特徴は地方によって異なっており、一定しない。故に不可視であるとされることもあれば、一見普通の外見だが特定の指が欠けているとか、動物の体の一部がくっついているとか言われることもある［...］ムッロと愛を交わす者は痩せ衰え、女のムッロに魅入られた男は疲労の果てに死ぬ[3]。

またエンゲルベルト・ヴィティヒ（Engelbert Wittich）はムッロについてこのように言及している。

聖なる夜はジプシーにとってきわめて重大な意味を持つ。ジプシーはこの夜、ムロが人間や動物たちに対して極めて特別な力を持つと信じている。ムロのいくらかは女性につきまとい、またいくらかは男性を殺害しようとねらったりする[4]。

世間一般に定着しているドラキュラを代表としたヴァンパイアのイメージとは、かなり異なっているといえるであろうが、不死者である点や特別な能力を有している点、好色であるといった共通点がある。

マルティン・ブロックの編纂したメルヘン集の中に『ヴァンパイア』（Der Vampir）というのがある。これはルーマニアのロマのメルヘンであり、ブカレストの神学教授バルブ・コンスタンティネスク（Barbu Constantinescu）が1878年に蒐集したものである。メルヘンの原題の意はWerwolf＝人狼である。人狼は厳密にいえばヴァンパイアではないのであるが、死に近い存在のゆえ、一緒によく引き合いに出される。ただし、ギリシア、ルーマニア、ユーゴスラビアなどでは人狼はしばしばヴ

3　マシュー・バンソン著　松田和也訳『吸血鬼の事典』、青土社、1994年、360-361ページ。

4　Wittich, Engelbert: Beiträge zur Zigeunerkunde, Frankfurt am Main 1990, S. 153.

ァンパイアと混合されるので、ここではヴァンパイアと同義と考えてよいと思われる。それではメルヘンの前半部分を引用しよう。

> むかし、ある村におばあさんが住んでいて、そこに幾人かの若い娘たちが集まり、糸を紡ぎ、冬の長い夜をいっしょに仕事をしたりしてしました。若い男たちもやってきて、娘らとふざけたり、けんかしたり、キスしたりしました。ところがひとり、いっしょにふざけたり、キスしてくれる恋人がいない娘がいました。しかも、それは、金持ちのルーマニア人の娘でした。
>
> 三日目まで、彼女にだれも近づこうとすらしませんでした。その少女は同じ年頃の娘たちみんなを見て、自分とつきあってくれる男性がいないのを不思議に思いました。この娘は美しかったのです。想像もできないくらい美しかったのです。
>
> あるとき、ひとりの美しい若者がやってきて、彼女を腕に抱き、キスし、夜明けのおんどりが鳴くまで、いっしょに座っていました。
>
> 朝早く、おんどりが鳴いたとき、若者は立ち去りました。若者を泊めたおばあさんは、彼がおんどりのような足をしていることに気がつきました。若者の足を見てしまったのでした。そしてこういいました。
>
> 「ニーツァ、おまえ何か気がついたかい？」―「わたし、よく見てなかったわ」―「もしわしの見まちがいでないのなら、あの男はおんどりの足をしていたよ」―「ほっといて、おばあさん。わたしは何も見なかったわ」

続きを要約しよう。その後、この謎の男はニーツァに会いにもう一度やってくる。おばあさんは彼が馬の足をしているのに気がつくが、ニーツァは何も見なかったという。そして次に男がやってきたとき、ニーツァは彼の後を追うために、糸のついた針をひそかに彼の背中に刺す。そして朝早く起きて、その糸の後をたどってみると、恋人が教会の墓穴にうずくまっているのを発見して驚く。

その後、謎の男すなわちヴァンパイアはニーツァを探しにやってきて、「教会」(Kirche) で何を見たかと問い詰める。しかし彼女が黙っている

ので、ヴァンパイアは父母を殺すと脅す。結局ニーツァの父母は殺される。

ニーツァは実のところ金持ちで、たくさんの牛と羊と12人の召し使いを持っていた。ニーツァは例の若者に殺されることを見越して、召し使いたちに財産を全部与えるかわりに、彼女の遺体を森の中にあるりんごの木の下に埋めることを約束させる。結局彼女は殺され、召し使いたちは言われたとおりにする。

半年後、あるひとりの若い王子が数頭のグレーハウンドをつれてウサギ狩りにでかける。そしてニーツァの墓を発見する。墓の上には今まで見たこともないような美しい花が咲いていた。そして王子はその花を手折って、持ち帰り、グラスにさし、自分の枕もとに置く。再び、本文の引用である。ヴァンパイアの少女が精気を吸う部分の描写である。

> 夜、王子が眠ると、花はグラスから伸び上がり、くるりと宙返りして、ひとりの美しい少女に変わりました。そしてこの美少女は若い王子につかまり、キスし、噛みつき、からみついたすえに、手を王子の頭の下にさし入れ、その腕の中で眠りました。ところが王子はそのことを何ひとつ知りませんでした。なぜなら夜明けには少女はもとの花にもどっていたからです。
>
> 朝早く王子は起きましたが、体の具合が悪く、父母にこのように訴えました。「背中と頭がとても痛いんだ」

その後、王子は体の節々が痛むようになり、食べ物と飲み物をよけいに欲しがるようになる。そして王様と王妃は例の花に原因があるのではないかと睨み、王子の床で番をし、そこで途方もなく美しい少女に出会う。

> 母と王である父は美しい少女を見て、彼女に手をかけました。そのとき、王子が目をさまして、その類いまれな美少女を見て、キスをしました。そして同じベットに入って、いっしょに明け方まで眠ったのです。
>
> 王子は結婚式をあげました。ごちそうを食べ、酒を飲み、人々は

この美しい花むこに感服しました。これほど美しい花よめもどこを探しても見たことがありませんでした。そして二人は半年いっしょに住み、そのあと、若い奥さんは二つのりんごを手に持った、金髪の男の子を産んだのです。王子はたいへん喜びました。

そこでそのうわさを聞いた例のヴァンパイアが彼女のもとへ押しかけ、教会でいったい何を見たのだとたずねる。彼女がしらを切り通すので、ヴァンパイアは彼女の子供を殺し、今度は夫を殺してやるぞと脅す。そしてニーツァはこう叫ぶ。以下、結尾の部分である。

「夫を殺させてなるものか。神よ、この男を滅ぼしたまえ！」ヴァンパイアは、ニーツァがそういうのを聞くと、たちまちのうちに死んで、怒りのあまり粉々になってしまったのです。

朝早く、ニーツァが起きると、両手にすくえるほどの血が脱穀場にたまっていました。ニーツァは義理の父に、できるだけはやくこの男の心臓を引きずり出すようにいい、王はそれを聞くと、長くは考えず心臓を取り出して、ニーツァの手に置きました。ニーツァは子供の墓に行って子供を目覚めさせました。心臓を墓の上に置くと、子供が立ち上がりました。それから、父と母のところへ行き、血を塗りつけると、ごらんなさい、ふたりは起き上がったのです。ニーツァはそれを見て、彼女の身におこったこと、ヴァンパイアの手によって行われたことをすべて物語りました[5]。

このメルヘンに登場するヴァンパイアの特徴を挙げるとすると、以下のようになる。すなわち、夜活動し、昼間は墓穴で眠っていること。彼によって殺されたものはヴァンパイアになる可能性があること。変身能力があること。血および精気を吸うことなどである。一般的によく知られているドラキュラと多くの点で類似性がある。男の方のヴァンパイアは足が馬やおんどりのものに変化するが、これはドラキュラの特徴というよりはメフェスト＝フェレスをはじめとする悪魔を彷彿とさせる。し

5 Zigeunermärchen 1962, S. 64-69.［Martin Blockによるドイツ語訳］

かしこれはむしろロマ独特のヴァンパイアの特徴といってよいであろう。ロマのヴァンパイアは何らかの人とは異なる外観をしていて、しばしば動物のような付属器官を持っているからである。また男のヴァンパイアが人を殺そうとしたり、ヴァンパイアと化したニーツァに精気を吸われることで、王子が痩せ衰えていく点に関しても、ロマのヴァンパイアの特徴と一致しているといえる。

このメルヘンのヒロインであるニーツァは、ヴァンパイアに殺されて女吸血鬼に変身するが、彼女はそもそも潜在的に吸血鬼になる因子を持っていたと推測できる。なぜなら彼女はお金持ちでたいへんな美人なのにもかかわらず、物語の冒頭において、どの青年もキスしたりふざけあったりしないだけではなく、近づこうとすらしなかったからである。直感的になんらかの危険性を感じたのであろう。

このメルヘンを全体的に見渡すと、非常にキリスト教の影響の目立つメルヘンであるといえる。これはヴァンパイアすなわち闇の者となってしまったニーツァがキリスト、神の力によって救済されるメルヘンである。りんごの木の登場の時点ですでに旧約聖書を連想させるが、ヴァンパイアとなってしまったはずのニーツァがなぜ、王子と結婚し、共に暮らすうちに普通の人間に戻ってしまったのであろうか。それは王子たちの愛の力が闇の力を克服したのだとみてよいであろう。ニーツァは王子たちとの生活の中で、きちんとした立場に復帰し、さらに子供を身ごもり、産むことで、キリスト教社会の人間として認められたのではないだろうか。

特に、物語の終盤で、ニーツァはヴァンパイアに対して「神よ、この男を滅ぼしたまえ！」と叫び、ヴァンパイアはこなごなになってしまう。この部分はこのメルヘンの最も重要な部分であるといえる。神の名を叫ぶことによって、闇の者が滅びるというところには、一神教の特徴が如実に現れている。キリストに相いれないものはキリストの敵とみなされるからである。ある意味、神を讃えている部分ともみなされるであろう。補足であるが、ヴァンパイアの代表ともいえるドラキュラが聖水や十字架を弱点としているのは、彼が闇のものであって、キリストと相いれない存在だからである。キリストと深い関係にあるアイテムはことごとく脅威となってしまうのであり、ドラキュラの弱点の多さにはそういう理

由があるのである。

ところで、このメルヘンには非常に謎めいた部分が目立つ。まずひとつ目の大きな謎は、なぜニーツァの生んだ子供がりんごを二つ持って生まれてきたかである。りんごに関してはドイツ迷信辞典（„Händwörterbuch des deutschen Aberglaubens“, 2000）には「豊かな実りのシンボル」とある。豊かな実りのシンボルとしての意味に相応して、あらゆるインドーゲルマン民族においては結婚のしきたりの中で登場したり、古代にはりんごを投げることが愛のしるしであったともある[6]。これはニーツァが子供を産むことが、神の恩寵であると考えたなら、実にしっくりくるといえるであろう。だがそれではなぜりんごがふたつでなければならないのか説明がつかない。ここでのりんごにはまだ別の意味があるのである。例えばバーバラ・G・ウォーカー（Barbara G Walker）はこのように書いている。

> イヴの知識の実は、かつては女神の神聖なる不死の心臓であった。これはインド・ヨーロッパのすべての文化圏においてあてはまることだった。西方にある多くの女神の楽園には、永遠の命のりんごが育っていた[7]。

またこのようにもウォーカーは書いている。

> エジプト人たちは、アヌビスが心臓を口に押し込むと、死者は生き返ることができるといっていた。ジプシーにも類似した話があり、あるジプシーの女魔術師は、死んだ息子の口の中に心臓を押し込んで、その息子を生き返らせたそうである。りんごはしばしば心臓を象徴していた[8]。

---

6 Vgl. Bächtold-Stäubli, Hanns u.a. (Hrsg.): Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Band Ⅰ, 3., unveränderte Auflage, Berlin 2000, S. 510ff.

7 Walker, Barbara G.: THE WOMAN'S ENCYCLOPEDIA OF MYTHS AND SECRETS, San Francisco 1983, P. 48.

8 Walker 1983, P. 362-363.

つまりりんごには命の源たる心臓の意味もあるということである。それゆえニーツァの産んだ子供は心臓をふたつ持って生まれてきたともとらえることができる。これは何を指し示しているかというと、マシュー・バンソンが『吸血鬼の事典』の中で、ルーマニアにおける最も一般的な吸血鬼であるストリリゴイについてこう書いているのである。

> 心臓の重要性はルーマニアにも見られる。当地では、ストリリゴイは二つの心臓を持ち、この第二の心臓がこの怪物に悪魔的な死後の生命を与えていると考えられている。これを刺し貫くと、空中高く血を吹き出すという[9]。

このメルヘンにおいてはりんごはかならずしもポジティブな意味では用いられてはいないのではなかろうか。確かにニーツァは殺されたあと、りんごの木の下に埋葬されることで蘇るが、それはヴァンパイアとして復活するのである。そしてニーツァが産んだ子供も心臓を意味するりんごを二つ持って産まれてきたがゆえに、まだ完全には救われてはおらず、潜在的なヴァンパイアであるととらえることも可能なのではないだろうか。事件のおおもとである男のヴァンパイアが生きているこの段階では、依然として問題は解決されていないのである。

さて、それではもうひとつこのメルヘンにおいて大きな謎がある。それはニーツァがヴァンパイアを滅ぼしたあと、なぜ「脱穀場」(Tenne)に血がたまっていたかということである。それは前述のヴァンパイアの特性に照らし合わせて考えれば、容易に解ける問題であると思われる。ニーツァは脱穀場に両手ですくえるほどの血がたまっているのを発見するなり、王に対して「できるだけはやく」(so schnell wie möglich) ヴァンパイアの死体から心臓を抜き出すようにと指示する。心臓は命の源であるので、ほっておいたらヴァンパイアが蘇ってしまうからである。脱穀場に血がたまっているのは、ヴァンパイアが蘇る前兆であると考えていいであろう。それでは、なぜそれが脱穀場でなくてはならないのかについては、アト・ド・フリース (Ad de Vries) が『イメージ・シンボ

9　マシュー・バンソン　1994年、194ページ。

ル事典』(“Dictionary of Symbols and Imagery”, 1974) の中で、このように書いている。

> 脱穀場が一般に「神秘の中心」と考えられていることは、「神秘の中心」を象徴する他のシンボルが脱穀場に関連して用いられていることからも明らかである[10]。

あるいはこのようにも書いている。

> 神霊が降臨する場所として、脱穀場には、肯定的にせよ、否定的にせよ、さまざなな呪術が働く[11]。

つまり脱穀場は何らかの神秘的な力をもった場所であり、ヴァンパイアの蘇る場所としては的確なのである。

物語の最後でニーツァがヴァンパイアの心臓を子供の墓に置くことで、その子供が蘇ったり、血を塗り付けることで父母が蘇ったりするのは、やはりその心臓は超自然的な力を持っており、命の源でもあるからなのであろう。結局神の力によって、ヴァンパイアは滅び、ニーツァたちは救済されるのであり、このメルヘンは最終的にはハッピー・エンドで終わっているとみなしてよいと思われる。

3 ドラゴンとは何か

ドラゴンに関する伝承はほぼ世界中のどこにでも存在しているといえる。各地のドラゴンの特徴は実に多種多様なのであるが、それでもある種の共通点が見受けられる。ドラゴンの定義に関して „dtv Lexikon“ にはこのように書かれている。

> 蛇や爬虫類のようなしばしばつばさのある空想上の動物。英雄、

10 アト・ド・フリース著 山下主一郎他共訳『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1984年、636-637ページ。

11 同上書、637ページ。

神々、創造の伝説や多くの民族の芸術において登場する。悪魔の根源的な力としてドラゴンは神々（インドラ、マルドゥーク、ゼウス、アポロ）によって戦われた。殺されたドラゴンの体から世界がしばしば創造される[12]。

概してドラゴンは蛇やトカゲの複合したような容姿を持ち、悪魔に類した超越的な力を持ち、しばしば英雄によって退治される。これらは大部分のドラゴンに見いだされる特徴といっていいであろう。ところでドラゴンについて論述するまえに、どうしてもインドについて触れておかなくてはならない。ロマの元来の故郷はインドのパンジャブ地方であるといわれており、なんらかの手掛かりが見つかるかもしれないからである。

インドにおいてはマホラガという大蛇、クリカラサというトカゲなど、一般的に浸透しているドラゴンのイメージとは遠いものが多く、形態も雑多で統一性があまりないといえる。その中で際立ったものを挙げるとすると、有史以前から崇拝されている蛇神ナーガがある。これはコブラを原型として生まれたもので、上半身が人間で、下半身が蛇の身体をしている。インド・アーリア人たちは紀元前13世紀頃、インドに侵入し、先住民族のドラヴィダ族を征服した。彼らは『リグ・ヴェーダ』で知られているように、多数の自然神を崇拝する典型的な多神教であった。そこでドラヴィダ族の信仰していたナーガを自分たちの神々の中に取り入れてしまうのである。ナーガは一方では神として崇められ、他方では悪魔として恐れられるといった奇妙な扱いを受けながら、長く生命を保ち、シヴァ、ブラフマー、ヴィシュヌの三神を中心とするヒンドゥー教が中心勢力となってからも、信仰を受けつづけることになる。なおインド神話は『リグ・ヴェーダ』を核にしているため、やはり多神教の要素を多く残し、厳密な最高神も、はっきりした神の階級も存在しない。このことはロマのメルヘンにも何らかの影響を残しているのではないかと考えられる。

日本や中国で知られているいわゆる龍は聖なるものとして崇拝され、

12 Dtv Lexikon, Band 4, München 1990, S. 228.

吉兆のシンボルとして祭られ、場合によっては神に等しい存在とみなされたりする。ところがその反対にヨーロッパのいわゆるドラゴンにおいては、ネガティブなイメージが支配的である。それはやはり聖書の影響が強いからであると考えられる。例えば『ヨハネの黙示録』の中ではこのように書かれている。

> さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた[13]。(12章7－9節)

> わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさせないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである[14]。(20章1－3節)

このように聖書においてはドラゴンは悪魔やサタンにたとえられ、天使に退治されるものとして描かれている。古代オリエントではドラゴンは神の敵として描かれることが多く、それを源とするネガティブなとらえかたがユダヤ人に受け継がれ、さらに聖書へと受け継がれていった。そもそもヨーロッパ全体では、古来からけっしてネガティブな見方一色というわけではなく、例えばギリシアにおけるラードーンのように、ゼウスの宝物である黄金のりんごを警護するものもいたのであるが、キリ

13 聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき、共同訳聖書実行委員会、1987年、新541ページ。

14 同上書、新553ページ。

スト教が広まるにつれ、ドラゴンを神の敵とみなす考え方に統一されていったのである。神と相いれないものをすべて悪とみなすのは、一神教の特徴といえるであろう。

4　ロマのメルヘンにおけるドラゴン

ロマのメルヘンにもドラゴンはしばしば登場する。例えばマルティン・ブロックの編纂したメルヘン集の中から、ウィーンのスラヴ語学者であり、ロマの方言の研究家であるフランツ・フォン・ミクローシチ（Franz von Miklosich）が、ルーマニア北部のブコヴィナで蒐集し、1874年に発表したメルヘンに『だまされたドラゴン』（Der betrogene Drache）というのがある。本文を引用しよう。

> ある老人がたくさんの子供たちといっしょに、森の洞窟に住んでいました。
>
> ある日、彼は妻にいいました。「パンを焼いてくれ。わしは獲物を探しにいくから」
>
> それで森の中へ入っていって、泉に到着しました。泉のそばにテーブルがあったので、そこに彼はパンを置きました。するとカラスが近づいてきて、彼が眠っている間に、それを平らげてしまいました。
>
> 老人は目覚め、パン屑にたかる蝿を見て、手で打ってかかり、百匹殺しました。このあと彼は机に、「こぶしで百匹殺したぞ」と書きました。それからふたたび横になり、さらに眠り続けました。
>
> 突然ドラゴンが水をくむために、革袋を持ってやってきました。そこで机に、老人が百匹殺したと書いてあるのを見ました。そして老人を見つけたとき、大きな不安に捕らわれ、彼が目覚めると、ドラゴンは恐怖したのです。
>
> ドラゴンは話しかけました。「兄弟の契りを結ぼう」
>
> そこで彼らは十字架のしるしのもとに、兄弟になることを誓いました。

メルヘンの冒頭部分であるが、すでにキリスト教文化圏のドラゴンの

扱い方とは違うといえるであろう。このドラゴンは厳格な一神教のもとでのただ恐ろしい、悪魔のような存在とは異なる。非情で無感情なわけではなく、不安にもとらわれるし、恐れもする人間に近い存在であるといえる。革袋を持って、水をくみにきたり、老人と兄弟の絆を結ぼうとするなど、ユーモラスな描写も目立つ。

そのあと、ドラゴンは老人といっしょにその城へ向かう。そして家で老人はドラゴンの妻に何か贈り物が欲しいかときくが、ドラゴンは殺されてしまうから何も望むな、とささやく。

あるとき、ドラゴンと老人は木の幹を持ってくるために森へ行くが、老人は森のすべてを切り倒して、家へ持って帰るという。あなたは森を滅ぼしてしまうから、わたしが木の幹を持っていきましょう、とドラゴンは説得する。

とうとうドラゴンは老人を怒らせてしまうまえに殺してしまおうと、妻と相談し実行に移すが、またもや老人の頓知によって阻まれてしまう。そこでドラゴンは袋いっぱいの金を与えて、老人に立ち去ってもらうことにする。

このように全体としては力の弱いはずの老人が、屈強なドラゴンをその知略によって、だまし打ち負かしていく様が描かれていく。恐ろしいはずのドラゴンが、巧みな術策によって翻弄されていく姿はこっけいでありながら、かえって同情を誘うほどである。単純な善悪二元論では推し量ることはできないはずである。このメルヘンの結尾はこのようになっている。

> 老人の住居である洞窟に到着したとき、老人はいいました。「君、ここで待っていてくれ。わしは犬たちをつなぐために家へ行く。そうしなくちゃ、あいつらが君をかみ殺しちまうからな」
>
> それで、老人は家の子供たちのところへ行き、木材でナイフをつくりました。それからもしドラゴンを見たら、「ねえ、母さん。父さんがドラゴンをつれてきたから、食べちゃおうよ」というように指図しました。
>
> ドラゴンはこれを聞くと、金の入った袋を投げ出して逃げました。そこでドラゴンはキツネに出会いました。

「ドラゴンさん。どこへ逃げていくんですか」－「老人がおれを打ち殺そうとしてるんだ」－「心配いりませんよ。ついて来てくださいよ。ぼくがあいつを殺しますよ。あいつは根っからのいくじなしですからね」

子供たちが出て来て叫びました。「母さん。キツネがドラゴンの皮を持ってくるから、洞窟を覆うのに使えるよ」そこでドラゴンは逃げ出し、キツネを捕まえ、地面に叩きつけて殺しました。

さて老人は村から車を持ってきて、金をその上に乗せ、村へ行って、家をいくらか建て、牛をたくさん買いました[15]。

このように老人がドラゴンをだまし、打ち負かしていく描写が繰り返される。最後に登場するキツネはヨーロッパのメルヘンにもしばしば見受けられるが、ロマのメルヘンにも動物の類いは頻繁に現れる。これはロマと動物の密接な関係性を示している。

しかしキツネにドラゴンが勇気づけられ、行動するというのはまずヨーロッパのメルヘンには見られない描写であるといっていいだろう。キツネ自体も人をだます、よくない動物として描かれることが多いが、西洋で悪魔の権化と見なされている怪物と、キツネが一緒に行動するというのはやはり異教的であるといえ、多神教の特徴が表れているといっていい。キツネにドラゴンが案内されるというのも極めてユーモラスである。

ところでこのメルヘンに登場するドラゴンは、何を象徴しているのであろうか。一般的にドラゴンは、竜巻や雷雨や干ばつといった自然現象に対する畏怖の念が形となり、蛇や海蛇を原型として、その他の爬虫類の特徴が複合的に加わっていったものとされている。心理学的にいえば、未知のものに対する脅威が根源にあり、本能的に感じる恐怖が反映されているといえる。しかしドラゴンは曖昧な存在であり、それが意味するものは種々様々である。例えばアト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』にはこのように書かれている。

15 Zigeunermärchen 1962, S. 229-232.［Walther Aicheleによるドイツ語訳］

あらゆる形の敵を象徴する。

a 原始の敵対者（のちに悪魔）。英雄の最大の試練は、竜と戦うことである。

b 旱ばつ、霜［...］雨を貯えているものとして竜はいつも雲の中に隠れている。

c 疫病と（毎年再発する）病い。とくに子供を死なせる病い。

d 暗黒。たとえば蛇アパプ。

e 独裁君主。

f 不純（ヘブライ－キリスト教の大敵）を表す。純潔＝（ユダヤの）処女性をおびやかすもの。

g 竜の大きく開けた口は地獄の門である。

h キリスト教ではドラゴンは過誤、異端、邪教、嫉妬を表す[16]。

ロマは流浪の民であり、はるかインドのパンジャブ地方から、ペルシアをへて、10世紀頃アルメニア、シリアを通過し、ギリシアにしばらく滞在し、15世紀初頭東南ヨーロッパに流入した。そのような長い旅路はきわめて苛酷であったはずである。彼らが通過した中近東付近では砂漠も多く、水も食べ物も手に入れられないまま、荒れ地をさまようこともあったはずである。干ばつなどの厳しい自然現象と戦うことも多く、その途中で病気になり死んでいった者たちもいたであろう。たくさんの子供たちが命を失うこともあったであろう。それゆえロマの生きてきたそういった厳しい環境が、ドラゴンに反映されていることも部分的にはあるのかもしれない。しかしこのメルヘンにおけるドラゴンを考察してみるに、あまりに人間味に富み、こっけいである。まるで主人公の老人がその知略によってドラゴンを翻弄するさまを表現して、聞き手を楽しませているようにとれる。それではこのドラゴンはいったい何なのであろうか。ロマにとって脅威であり、敵であったもの。それはロマを迫害した非ロマ、定住者側の人間なのではないだろうか。

マルティン・ブロックはその著書『ジプシー』（„Die Zigeuner“, 1997）の中でこのように書いている。

16 アト・ド・フリース 1984年、188ページ。

> ヨーロッパ国家がかつて数百年にわたって、ジプシーを亡き者にしようと骨を折ったが、彼らをコントロールしようとはしなかったということを、わたしはすでに『古い記録ではどうであったか』の章で詳述した。中部ヨーロッパと西部ヨーロッパにおいては、この手のつけられない者たちに対して与えられたあらゆる処置は、効果なしに等しかった。法の保護を剥奪すると宣言したり、強制的に定住させようとしたり、条例によって放浪をほとんど不可能にしたりしたにもかかわらず、繰り返し、彼らは自分たちの慣習を保持しようとする道を見いだしてきた。たとえ彼らの種族の仲間のいくらかが、この厳しい、定住者側の人々によって発布された条例の犠牲となって、命を落とさねばならなかったとしてもである[17]。

このようにロマは長い間、ヨーロッパの定住者側の人々から圧力を受けてきた。それにもかかわらず、ロマはその圧力に屈せず、自分たちの伝統や文化を我慢強く守り続けてきた。特に迫害が激しかったのが、ドイツを始めとする先進国であったが、それらは国家組織がより緊密であるため、異質な民族であるロマを排撃したのである。

ただしここで取り上げたメルヘンが蒐集された、ルーマニアを初めとする東欧諸国においては、ロマに対する扱いは比較的寛容であったことを付け加えておかねばならない。それは肌の色など人種的特徴が類似しており、生活水準も極端に離れたものではなかったからである。その辺りの親近感がユーモラスなドラゴンの描写に表れているのかもしれない。

このメルヘンにおける主人公は老人で、子供をたくさん持っている。子だくさんであることは、ロマの特徴と一致している。彼らは子供をたくさん産んで大切にし、捨て子まで拾って育てようとする傾向があるからである。また老人と子供たちが住んでいる場所が「洞窟」(Erdhöhle) であるという点も見過ごせない。これは一時的な仮ずまいであり、その土地に確固とした根を下ろしていないものを指している。市民社会の外にあるものであるといっていいだろう。その一方ドラゴンの住居は「城」(Schloß) である。これはまさに老人の住居と対極的な関係

17 Block, Martin: Die Zigeuner, Frankfurt am Main 1997, S. 216.

にある。定住者の住まいとしては最高のものだからである。このことから老人とドラゴンの関係を、ロマとヨーロッパの人々ととらえることも不可能ではない。

ドラゴンを知恵によって欺き、うまく利用していく様も、ロマを彷彿とさせる。もちろん多くのロマが、鍛冶や手工業などで真面目に働いて、お金を稼いで生活していたのはいうまでもないのであるが、それが不可能な場合や貧困に窮していた場合、生きていくために手段を選んではいられないのである。クラウディア・マイアーホーファー（Claudia Mayerhofer）が指摘しているように、例えばロマの女性が鳥の盗みで多彩な技術を持っており、会話によって農婦の注意をひいている間に、子供たちに穀物をはめた釣り糸でにわとりを捕まえさせるとか、あるいは馬商人が馬を若々しく元気に見せるために鞍の裏に釘を打ち込んでおいて、買う手が乗った時に、棒立ちにさせるよう仕組んでおくとか、あるいは三酸化砒素を投与して、馬を意図的に興奮させるといったこともあった[18]。ただしロマは大きな犯罪はほとんど行わず、どれも極めて罪のないものばかりであった。

このような巧妙なやり方は、ドラゴンを翻弄する老人と一致するものであるといえるが、しかし当然すべてのロマがこのようなヨーロッパの人々をだますような行為を行っていたわけではないので、どちらかというとロマの願望が表れたものととらえた方がいいのかもしれない。メルヘンにはおおよそその民族なり階級の願望が反映されるからである。『児童、青少年文学の事典』（„Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur“, 1977）はメルヘンについてこのように記している。

> メルヘンは語り手と聞き手にとって人生の克服となる。そもそもの幸福は問題の生じた状態の解消にある。主人公はメルヘンの冒頭に妨げられた元来の秩序を再び確立する。メルヘンによって語り手自身の（苦しい）生活を抜け出し越えていくことが、自己確認を通して語り手にとって可能となる。[...] メルヘンは人生の克服となる。

18 Vgl. Mayerhofer, Claudia: Dorfzigeuner, Wien; 2., verbesserte Auflage 1988, S. 113ff.

なぜならメルヘンは、楽観的に幻想的に塗り上げられ、そして（人生のいざこざを解決する可能性が他にないので）奇跡によって決定がなされるというこの世界のひとつの解釈を、語り手と聞き手の実際の経験と調和させるからだ。それゆえ文字どおりメルヘンにおいては願望は着想の父となる[19]。

東欧においてもロマの生活は、宮廷の音楽家などの特殊な例を除けば、概して極貧のもっともたるものであったし、疎まれ差別されたという点においては変わらなかった。マルティン・ブロックいわく、ルーマニアでは19世紀の初期まで膨大な数のロマが王室あるいは僧院の奴隷であり、解放後も貴族地主の農奴であり続けるものもいた[20]。このような非常に苦しい境遇にあって、何らかの精神的な支えというものが必要となるのは当然といえるだろう。そして貧しいロマにとって、その代表的なものがメルヘンであったのである。語り手を中心にして聞き手が集まり、一体化しながら共に苦しい境遇を乗り越えていく。単なる現実逃避などではなく、一緒に作り上げていく場、世界にこそ重要な意味があったにちがいない。ドラゴンを知恵によってやり込めていく老人に対して、聞き手は喝采を浴びせたであろうし、そうやって生きて行く力を蓄えていったのだろう。それこそがユーモアやウイットに富んだ物語の本質的な力といえる。このメルヘンの最後で老人は家と財産を手に入れ、土地にしっかりと根を下ろすが、これは流浪を続けて来たロマの見果てぬ夢が、直接的に表れ出たものなのである。

5　ロマのメルヘンにおける悪魔

今まで、ヴァンパイアとドラゴンについて扱ってきたが、これらはいずれも悪魔とは切っても切れない関係にある。ヴァンパイアは闇の世界に属するものであり、ドラゴンは悪魔の化身とみなされることがあるからである。悪魔について、„dtv Lexikon“ にはこのように記されている。

---

19 Doderer, Klaus (Hrsg.): Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur, Band 2, Weinheim und Basel 1977, S. 423-424.

20 Vgl. Block 1997, S. 217ff.

悪魔はキリスト教信仰の伝統によれば「この世界の主」たる神の敵（Joh. 12, 31）であり、誘惑者（Mt. 4, 1-11）であり、死の力の主（Hebr. 2, 14）である。彼の権勢はキリストによって根本的に打ち砕かれた。その結果、信者たちは彼に抵抗できるようになった。それゆえ悪魔はキリスト教においては二元論的考え方の一部ではない。彼の最終的な破滅はこの世の終わりに起こる。[...] 天使に関するカトリックの教義によれば、悪魔は堕落した悪しき霊の最上位のものである。最近では悪魔はむしろ人格化されない悪とみなされている。プロテスタントの神学においては、悪魔は世界がみずからでは自由になることのできない神に対する反抗のシンボルとみなされている[21]。

あるいは悪魔研究で有名なジェフリ・バートン・ラッセル（Jeffrey Burton Russell）はこのように書いている。

悪魔とは悪の原理の人格化である。悪魔を善の主から独立した存在とみなす宗教もあれば、主の被造物とみなす宗教もある。いずれにせよ悪魔はただのデーモン、限定された能力をもつ卑小な精霊のひとつではなく、悪そのものの力、意欲をもち命令する悪の力の、感覚をもつ存在としての人格化である[22]。

このようにキリスト教文化においては悪魔は神に対立するものであり、悪の象徴とみなされている。悪魔は滅ぼされるべきものであり、そこには神と相反する異質なものを受け入れずに否定する、一神教の特色があらわれている。

それでは悪魔はロマのメルヘンの中では、どのように取り扱われているのであろうか。そこには当然キリスト教的な考え方の影響も見られるであろうが、みずからの文化や慣習を頑なに守り続けてきたロマである

21 Dtv Lexikon, Band 18, München 1990, S. 155.

22 ジェフリ・バートン・ラッセル著　野村美紀子訳『サタン―初期キリスト教の伝統』、教文館、1987年、15ページ。

から、インドを起源とするアジア的な多神教の要素がその根幹に残っているはずである。

ロマの先駆的な研究家であるハインリヒ・フォン・ヴリスロキ博士が、1883年にトランシルヴァニアで蒐集したメルヘン集の中に、『だまされた悪魔』(Der betrogene Teufel) という物語がある。そのあらすじはこうである。

むかし非常に貧しい仕立て屋がいた。彼には息子が12人いたが、日々のパンにも事欠くありさまだった。ある日、仕立て屋が子供たちを飢えから救うことができれば悪魔にでも魂を売ろうと考えていると、悪魔が現れ、裕福な暮らしを約束するかわりに、七年後に迎えにくるといった。そして契約書にサインし、悪魔が立ち去ったあと、長持のなかに金銀を発見し、国一番の金持ちになった。

そして七年経ち、悪魔が迎えにくる日がきた。屋根の上に黒い卵が見つかり、それはカラスに変化し、カモの足が生え、ヤギの角が生え、長い尻尾が生え、そしてとうとう悪魔に変化した。仕立て屋は子供たちに、教会へ行って、司祭にミサを読んでもらうように頼む。そして悪魔は仕立て屋に地獄に来るよう迫る。結びの部分はこうである。

> 「わたしはいつでも旅立てます。でも、息子たちに書き写して残しておくために、契約書を貸してください。わたしがどこへ消えてしまったのか、子供たちに知ってもらいたいです。それにもしあの子たちがわたしのところに来たいんなら、契約書にサインすることもできますし」
>
> 悪魔はこれをたいへん喜び、仕立て屋に契約書を手渡しました。ところが仕立て屋は、自分の名前のところにすばやく聖水で十字を書きました。するとガタガタ、メリメリという音とともに、悪魔は消えてしまいました。仕立て屋は息子たちとともに、さらに長いあいだ、しあわせに満足して暮らしました[23]。

これは極めてキリスト教文化の影響が濃く表れたメルヘンであるとい

23 Wlislocki 1886, S. 100.

えるだろう。カラス、山羊の角、カモの足、長い尻尾といった動物の複合的な特徴を持った悪魔の不気味な姿は、まさに西洋のそれと一致するものである。悪魔に魂を売って願いをかなえてもらうという話の筋も、『ファウスト』をはじめとしてヨーロッパにおいてなじみのものである。

ところでこの仕立て屋は、司祭にミサを読んでもらうよう頼んだりするくだりから考えて、キリスト教徒のようである。ロマはヨーロッパに流入したとき、生活のため、あるいは保身のためにキリスト教徒になるケースが多かった。ロマとキリスト教の関係について、マルティン・ブロックはこのように書いている。

> 外面的にはジプシーは様々な宗派の布教の熱意に譲歩し、みずからをローマーカトリックあるいはプロテスタントと呼んだり、ギリシア正教あるいはイスラム教徒と呼んだりする。しかし内面的には彼らは常にジプシーのままであり、彼らの古いジプシーの信仰を守る。
>
> 彼らがプロテスタントよりもむしろカトリックの方に魅力を感じているというのは特徴的なことである。すなわちカトリック教会の豪華な儀式や絢爛さが彼らの空想にかない、その本質に適合するからだ。それゆえ彼らがカトリック教会をたずねる光景が、しばしば見かけられる。彼らは十字を切り、ミサに参列し、聖餐式をも楽しむ[24]。

このようにロマがいかに通過した土地の文化を吸収し、自分たちが生きて行くのに役立てたかが分かる。彼らの文化は必然的に混淆したものになるが、それでもその根幹においては、独自のものを守り通したといえる。キリスト教に改宗してもロマの宗教観は根本的には変わらなかったのである。それではロマの宗教観で何が特徴的であるかということになるが、例えばリューディガー・フォッセン（Rüdiger Vossen）はこのように書いている。

---

24 Block 1997, S. 209.

> キリスト教化してもう長いカトリックのジプシーにおいてさえ、父なる神やさらにイエス・キリストの重要視されるべき役割が、聖母マリアの崇拝と比べると、ずっと背景に退いているのが目立つ。[...] 住居や箱馬車において通例は、(プロテスタントのシンティを除いて) キリスト教の十字架は見られず、いずれにせよそれと違って、「聖なるすみ」に聖母マリアの小さな彫像や肖像が見いだされる。[...] しかしながら、ヨーロッパのジプシーによって崇拝されている他の女性像、例えばサラ、ビビ、アナといったものを考慮に入れると、わたしの考えによると、わたしたちはジプシーのインドの根源的なものにまでさかのぼらねばならない[25]。

このようにロマの宗教観のひとつとして、母神崇拝の傾向が見られるというのが挙げられる。ロマの宗教とその源流について考察するのは本論の目的ではないので、また別の機会にゆずるが、いずれにせよ、ロマはキリスト教をはじめとするさまざまな宗教に改宗しても、自分たちの伝統を頑なに守ろうとしたということはいえる。そして苛酷な状況の中で生き抜いていくために、都合のいい部分をうまく借用し、自分たちの文化に取り入れていったのである。このような事情がここで取り上げたメルヘンに強く反映されているように思われる。メルヘンの最後の部分で、契約書に聖水で十字を書いて悪魔を退散させるあたりは、ロマの柔軟性が顕著に表れた一例だといえるだろう。

ヴリスロキの蒐集したメルヘンの中に『人間に仕える悪魔』(Der Teufel dient einem Menschen) という物語がある。これは先程のメルヘンとは反対に、異教的な要素の際立ったメルヘンである。前半部分を引用しよう。

> 昔むかし、あるところに貧しい男がいました。貧乏と困窮を終わらせようと、仕事口を求めて世の中に出ていきましたが、長いあいだ、仕事を見つけられずにさまよいました。あるとき十字路にやってきますと、そこに悪魔が座っているのが見えました。すると悪魔

25 Vossen, Rüdiger: Zigeuner, Frankfurt/M; Berlin; Wien: Ullstein 1983, S. 225-226.

は、ひどく嘆いて、「ああ、つらいな、どうすりゃいいんだ！」といったのです。

貧しい男は「いったいどうしたんだい」とたずねました。すると悪魔はこう語りました。

「きのう、ちょうどこの十字路で食事をしている職人に出会ったんだ。職人はいっしょに食事をするようわしを誘った。食べ終えたあと、奴は火酒がいっぱい入った大瓶を取り出した。そして二人いっしょに酔っ払うまで飲んだんだ。職人は行ってしまい、わしはこの道端に置き去りにされてしまった。そこに司祭がやってきて、わしの尻尾にこの聖なるお香のランプをひっかけたんだ。それでわしはもう動けなくなってしまった。だれもランプを外そうとしてくれないからな」[26]

それ以降の話を要約するとこうである。悪魔が助けてくれた人に九時間仕えると約束するので、貧しい男はランプを外してやる。すると悪魔は鉱夫に変身して、他の鉱夫たちに後で山分けするから鉱山を掘らせてほしいと頼む。悪魔はだれにも知られていない金のありかを知っていたのである。数時間後、悪魔は車二十台でも運べないほどの金を手にし、それから大きな袋に金をいっぱい詰めこんで、貧しい男のところへ持っていく。こうして男は大金持ちになる。

このメルヘンも表面的にはキリスト教の影響をうかがわせる。例えば司祭が悪魔にお香のランプをひっかけて封印してしまうあたりもそうであるし、それが行われた場所が「十字路」(Kreuzweg) である点も見逃せない。十字路は当然十字架との関連を想起させる。ここで登場する職人はおそらく司祭の仲間であり、結託して悪魔を罠にかけたのであろう。

しかしこのメルヘンで見逃すべきでない点は、キリスト教の影響ではなく、もっと根底にある異教的な要素である。ここで描写されている悪魔の姿は、キリスト教的な発想からは考えられないものである。キリスト教においては悪魔は絶対的な悪であるが、このメルヘンにおける悪魔は、陽気に職人といっしょに火酒を飲んで酔っ払ってしまうなど、すこ

26 Wlislocki 1886, S. 106.

ぶる人間的に描かれている。尻尾にランプを引っかけられて動けなくなってしまうあたりもユーモラスである。助けてくれた人間に仕えるという約束を、律義に守ってしまう点も誠実であるといえる。キリスト教的な発想なら、最終的に主人公は破滅してしまうにちがいないからである。こういったことから一神教からは考えられない、異質なものを受け入れるおおらかな多神教的な感性が見いだされる。おそらくロマはアニミズム的要素の濃いヴェーダを骨格とするヒンドゥー教から、そのような発想を受け継いだのであろう。ロマのアニミズム的な発想はよく知られたところで、例えばクラウディア・マイヤーホーファーはロマの盗みと関連させてこのように言っている。

> 盗みに対する彼らの考え方は、彼らがそのような犯罪の動機を尋ねられた時に言い逃れをしようとする、あの素朴な発言に示される。つまり例えばにわとりを盗んだ女性のジプシーが言うように、にわとりが彼女のところにやってきたのは、その責任ではないとか、あるいはワインのたるを手に入れた他のものは、それが彼のところへ転がって来たという主張で自分を弁護した[27]。

こういったエピソードはまさにアニミズム的な発想からくるのであろう。

なおこのメルヘンに登場する貧しい男は、やはりロマとの類似点を持っている。貧乏と困窮に苦しめられ、仕事を求めて長い間流浪するというくだりは、ロマの置かれた苦しい状況を思い起こさせる。それが本来疎まれるべき存在である悪魔の助けによって、大金持ちになるという終わり方は、まさにそのような苦境から脱出して、安定した生活を送りたいというロマの願望が表れ出たものなのであろう。

むすび

メルヘンというのはどの民族においても似通った筋や内容を持つといえるのであるが、同時にその民族独自の考え方や慣習が秘められている

27 Mayerhofer 1988, S. 112.

ものである。特にロマの場合、その故郷であるインドを基盤として、ヨーロッパにいたるまでに通過した地域の文化的影響が含まれているといえる。ロマの通過した地域の影響を逐一考察するのはきわめて難しいのであるが、ロマ文化の原点であるインド的要素とヨーロッパ的な要素を確認するのは比較的容易である。特にヨーロッパ文化の支柱ともいえるべきキリスト教の影響については、かなり明確に表れている。この論で取り上げたメルヘンの中では『ヴァンパイア』と『だまされた悪魔』においてそれは顕著であるといえる。

しかしそれは実のところ表面的なものにすぎず、多くのロマは自分たちの伝統的な文化を守り通した。ヨーロッパにおいてキリスト教を受け入れておけば、生きていきやすいからである。彼らが苛烈なまでの迫害を受け続けながら、生き延び、さらに自分たちのスタイルを守り続けたことは驚嘆に値する。その原動力の一部となったのが、ここで取り扱われたようなメルヘンなのである。貧しく苦しい生活の中で、周囲の人々から疎まれながら、それでもウィットやユーモアによって生命を与えられたメルヘンを語りつぐことで人生を克服していく。これは物語本来の在り方なのであろう。

ロマのメルヘンには彼らの願望が反映されているケースが非常に多いといえる。物語の主人公はおうおうにして流浪していたり、確固とした家を持っていないのであるが、それはロマの身の上そのものともいえ、そういった主人公が苦難に直面しながらも、知恵によってそれを克服し、最後は自分の住むべき場所を見いだし、お金持ちになる。これと同様のパターンがあまりに頻出していることが、逆にロマの渇望していたものを明確に指し示すといえる。

ロマのメルヘンにおいてもう一つ特徴的なことは、悪に対する態度がおおらかであるということである。これは裏を返せば、キリスト教におけるような絶対的な悪というものが存在しないということである。主人公に危害を加えるキャラクターを徹底的に弾劾するわけではなく、ユーモラスに人間的に描写するというあり方は独特なものである。これは自分と異質なものでも受け入れる多神教的な特徴ともいえ、自分たちのスタイルを守りながらもこういった柔軟性を持っていたがゆえに、ロマは生き延びることができたともいえるであろう。

最後に、この論で取り上げたメルヘンは19世紀末のものであり、現代では地域によって差はあるものの、ロマは混血などによってその特性を失いつつあることを付け加えておこう。

使用テキスト

Herausgegeben von Walther Aichele und Martin Block: Zigeunermärchen (Die Märchen der Weltliteratur), Düsseldorf 1962.［以下、Zigeunermärchen と略記］

Gesammelt und aus unedirten Originaltexten übersetzt von Dr. Heinrich von Wlislocki: Märchen und Sagen der Transsilvanischen Zigeuner, Berlin 1886.［以下、Wlislocki と略記］

その他の主要参考文献

栗原成郎『増補新版　スラヴ吸血鬼伝説考』、河出書房新社、1991年。

仁賀克雄『ドラキュラ誕生』、講談社、1995年。

森野たくみ『ヴァンパイア　吸血鬼伝説の系譜』、新紀元社、1997年。

ブラム・ストーカー著　平井呈一訳『吸血鬼ドラキュラ』、東京創元社、1971年。

苑崎透『幻獣ドラゴン』、新紀元社、1990年。

森豊『龍』、六興出版、1976年。

ジェフリ・バートン・ラッセル著　大瀧啓裕訳『悪魔の系譜』、青土社、1990年。

Die Ungeheuer in den Märchen der Roma

Yoshiki MURAKAMI

Das Märchen hat in allen Völkern ähnliche Handlungen und Inhalte, aber gleichzeitig bergen sie auch je nach der Kultur-Chronik Gedanken und Brauchtum. Das Märchen ist eine Kultur.

Die Roma sind ein wanderndes Volk und haben verschiedenartige kulturelle Elemente in den Durchgangszonen akzeptiert. Es besteht Vermutung, die Roma seien von der indischen Region Pandschab fortgezogen, durch Persien und Griechenland gereist und hätten in Europa

die Reise beendet. Deshalb müsste man als Grundlage in den Märchentexten indische Elemente und Einflüsse der einzelnen Regionen finden können.

Seit die Roma in Europa eintrafen, sind fünf Jahrhunderte verstrichen. So lassen sich europäische Elemente relativ leicht in den Märchentexten feststellen. Besonders deutlich zeigen sich Einflüsse des Christentums, dem Kern der europäischen Kultur. Diese Tendenzen sind in Märchen wie „Vampir“ oder „der betrogene Teufel“ stark. In „Vampir“ wird der Blutsauger vom Gebet zu Gott vernichtet. In „der betrogene Teufel“ zeichnet der Held mit geweihtem Wasser ein Kreuz und vertreibt den Teufel.

Aber in Wirklichkeit waren diese Einflüsse des Christentums nur oberflächlich, denn viele Roma hielten an ihrer traditionellen Kultur fest. In Europa können die relativ leicht leben, die das Christentum annehmen. Deshalb nahmen Roma diese Religion flexibel auf. Doch das Wesentliche der Roma blieb unverändert. Es überrascht, daß sie heftig verfolgt wurden, dennoch überlebten und ihren Lebensstil halten konnten. Das Märchen kann für sie eine große Stütze gewesen sein. Unter armen und strengen Lebensbedingungen muss es ihnen eine Lebenskraft geworden sein, witzige und humorvolle Märchen fortzuerzählen. Das Märchen wird Erzählern und Hörern zur Lebensbewältigung. Dies ist das ursprüngliche Leitbild der Erzählung.

Die Roma spiegeln ihre Wünsche oft im Märchen wider. Der Held wandert häufig oder er hat kein festes Haus. Das ist die Situation der Roma als solche. Der Held steht einer schwierigen Aufgabe gegenüber, bewältigt sie durch Klugheit, schließlich erhält einen festen Wohnsitz und wird reich. Dieses Pattern erscheint sehr häufig. Es verrät uns den dringlichen Wunsch der Roma.

Es gibt zum Beispiel das Märchen „Der betrogene Drache“. Der Held, ein Alter, hat viele Kinder und kein festes Haus. Er trifft einen Drachen im Wald. Aber er betrügt immer wieder listig den Drachen. Der schwache Alte besiegt den starken Drachen. Es erinnert an die Beziehung

zwischen Roma und Europäern. Denn ein Teil der arbeitslosen blutarmen Roma betrog mit Klugheit (auf schuldlose Weise) Europäer und erwarb damit Lebensnotwendiges und Geld. Schließlich nahm der Alte viel Gold von dem Drachen, baute sich Häuser. Das spiegelt den Wunsch der Roma nach einer Bleibe wider.

Charakteristisch ist in dem Märchen der Roma auch, dass die Haltung zum Böse großmütig ist. Mit anderen Worten: es gibt kein absolutes Böses wie im Christentum. Es ist eigentümlich, dass der gefährliche Gegner nicht konsequent angeklagt, sondern humoristisch und menschlich dargestellt wird.

Es gibt ein weiteres Märchen „Der Teufel dient einem Menschen". Darin begegnet der Teufel einem Handwerkerburschen. Beide betrinken sich. Da kommt ein Pope und hängt dem Teufel einen Weihkessel an den Schwanz. Der Teufel kann sich nicht mehr rühren. Aber der arme Mann kommt und hilft ihm. Der Teufel gibt dem Mann viel Gold. Dies ist ein polytheistischer Zug, eben auch Fremdes anzunehmen. Man kann sagen, dass unter heftiger Verfolgung die Roma wegen solcher Geschmeidigkeit überleben konnten, ohne ihren Stil zu verlieren.

Es sei angefügt, dass die vorliegenden Märchentexte am Ende des neunzehnten Jahrhunderts ediert sind und die heutige Situation der Roma verschieden ist.